
不可欠

iuと猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不可欠

【コード】

N1753M

【作者名】

iuと猫

【あらすじ】

通院する女性の不条理な感覚を描いてみました？

この街に越して来てしばらく経つ。

いつまでもなじめない街並みに空虚な色を感じながら、無難に日々を過ごす私だったが、久しぶりに背中にかびが生えた。ので、病院を訪ねなければならなかった。

背中にカビ…そんなに奇異な事ではない。先天的に生まれ持って体に細菌がいて、体調に応じて背中が痒くなる、というだけだ。

子供の頃、一生付き合う持病と診断されていて、人に感染しないし日常生活にも支障ないらしきものらしく、痒みが出ない間は、時に気に止めていない。また実は、痒みが出ても大した事はなく、気にしなければそれで済みそうなものだが、あいにく美肌でありたいと願う当たり前に女だし、習慣的に治療を続けていて。

会社を早く退いて、人に道を尋ねながらそこに辿り着いてみると、一方通行の通りを挟むようにして、皮膚科医院が並んでいた。はじめは棟が離れた同じ病院だと思ったが、看板が違う。建物の趣も違って、一つは近代的な新鋭医院、かたや少しレトロ調の、例えば木造洋館を改築したと思わせる古い医院が、路を挟んで並び商って（あきなつて）いるのだ。

同業で潰し合いにならないのか、変わってると思いつながら、どちらかというところと気軽な古風な医院を選んで、お決まりの初診というものを受けたのだった。

「カビですね、体質の問題です」

意外な事に診察してくれた医者は、古風でない若くハンサムな、患者の笑顔を目で追い合わせてくれる気易い感じの先生だった。

「性病なんかじゃないタイプの皮膚病ですよ、大丈夫ですよ」

私は、性病じゃないし遊んでいませんし大丈夫だとも知っていますし、との内心の口答えをおくびにも出さない。

医者とはいえ異性に、またひと回り程しか年上でない若い彼に（まだ若いよね、先生？笑）背中とはいえ肌を見せるのは、恥らうがお決まりの儀式だし、快活に「軽いアレルギー症状ですから、大丈夫」と、いやらしくない笑顔を見せてくれる彼の診察も、特に気になる事はなくそこは終わる。

次に、看護師に導かれて廊下を隔てた別室に移り、3つある寝台の内の一つに案内された。

一つ一つを囲むカーテンに仕切られたベッドに横たわり、背中に紫外線を照射する治療を受けるのだ。ブラを取り背中を露あひわにして指示の通りにうつ伏せて、看護師が「自動で電源は切れますので」と。

それが始まって数分後の事だった。

「…もれてるよ、まずいよ」

閉じられたカーテンの先から、看護師達のヒソヒソ話が聞こえてきた。

「…止まらない、急に閉じたら爆発する」

「アタシ習った事がある、圧力差で破裂する事があるんだって」

異様な感じでエアの漏れる音がしている。何か不具合が起こっているのだろうか？

まずいよ、やばいよ、とのセリフが続くのでさすがに冷や汗を感じて、カーテンの隙間から光景を伺うと、2人いる看護師の背中が見えるだけだ。彼女達は医療器具の整理など、屈託なく普段の仕事をしている、異状なし？

けれども、カーテンを閉じてしばらくすると、また緊迫した危険そうなヒソヒソ話が始まるのだ、なぜだろう。

治療時間は10分間とないので、それが何であったのか見当もつかなかった。

今後の治療方針について、医者が説明をしてくれるというので、診察室に戻ると、待ち受ける彼はイタズラをした子供の顔でニヤニヤしていた。

「？」

「ベッドで横になっていて、聞こえたでしょう？」

「？」

「あれは仕掛けです、カーテンに仕込んで、驚かせる会話が流れるようになっていきます。ビックリしましたか？もちろん悪戯の演出なので心配ありません、でも…オモシロイでしょう？」

うちにはこれといって自慢できる物がないので、とまるで悪びれない医者に、驚いて呆れてしまった。いたずらだったのか…

ふざけている、患者を何だと思っっているのかと、その時は怒りに体が震えたものだったが。

けれども。いつしかその医院に、好きで通うようになった私がい

た。

「1枚…2枚、恨めしい、ヒュー、ドロドロ」

アハハ、今日はオカルトバージョンかと、今は当たり前前に受け止めている自分が、ベッドに寝そべっていたりする。

価値が多様化しそれが求め詰められる時代である。そんな中で何となくだ…自分にとってここは必要ではないが、きつと不可欠な医院なんだと感じる。

分かった事もある、通りの向こうの病院は随分評判の良い、腕が確かな病院なのだそう。ではここにとって不可欠な存在なのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1753m/>

不可欠

2010年10月11日08時35分発行